

1 学校教育目標

- ・みずからを鍛え みずからを伸ばす生徒
- ・正しく判断し 責任を持つ生徒
- ・人を大切にし 社会に尽くす生徒

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○困難に遭遇した時に、それに立ち向かう勇気の核となる心の体験ができる学校。 ○よりよい社会を創造する主権者としての知識、資質を身につけられる学校。 ○一人の人間が家庭から社会集団へと参加するのを促し、支援できる学校。
○児童・生徒像	○生涯にわたって健康で明るい生活ができるよう心身の鍛練に努める生徒。 ○社会的に正しい判断ができ、自己の思いをしっかりと伝えられるとともに、相手の意見もしっかり受け止められる生徒。 ○自立した社会人として成長するための知識、資質を身につけている生徒。
○教師像	○教育公務員としての使命と責任を自覚して、情熱をもって教職の遂行に努める教師。 ○区民の教育に寄せる期待と負託に応えるために、常に資質を磨く努力をし、生徒の成長や発達を深く理解して、指導できる教師。

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校の現状】

- 学校について [よさ] 少人数の良さを生かし、全教職員で生徒一人一人に目を向け、生徒の主体性を伸ばすようきめ細やかな対応を図っている。
[課題] ①基礎学力の向上と個に応じた指導の充実 ②自己肯定感の育成 ③学校教育と家庭教育の連携
- 生徒について [よさ] 純朴で明るい。互いを尊重しながら穏やかに生活している。
[課題] ①社会性を磨き、学力の必要性を認識して、学力向上を図る ②自己肯定感・自己表現能力の伸長を図る
- 教師について [よさ] 教員数が少ない中、学習指導・生活指導・学級指導・特別活動・部活動・研修などに真摯に取り組んでいる。
[課題] ①指導力の向上 ②人権尊重意識の向上
- 保護者・地域について [よさ] PTA 役員・地域ともに協力的である。「地域の学校」との思い入れや期待がさまざまな場面で感じられる。
[課題] 保護者の学校支援（PTA 活動、授業参観・保護者会等の出席者数など）が減少している。

【前年度の成果と課題】

- 基礎学力の定着と向上 区学力調査の通過率は、目標を約8ポイント上回った。しかし、学年が上がるごとに通過率が低下する傾向が顕著であり、授業改善を推進し、定期考査や単元テスト等を活用した理解度の分析をとおして、放課後補充教室やA I ドリルを活用した家庭学習の充実を図り、さらなる基礎学力の定着と向上を推し進める。
- 教師の学習指導力向上 小中連携での授業研究はコロナ前の状況に戻して実行できた。校内でも授業見学週間や道徳授業見学週間を設定し、統一の「授業相互参観カード」を活用してO J Tによる授業力向上に努めた。生徒の学習改善や教師の指導改善につながる学習評価になるよう、今後も「指導と評価の一体化」を確実に進めていく。今年度も小中連携と教科指導専門員の活用、「道徳」を中心に指導技術の向上に取り組んでいく。
- 生徒・保護者との信頼関係に基づいた生活指導 道徳、キャリア教育、特別支援教育等、心に響く指導に努め、生徒・保護者との信頼関係を強める。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	教師の学習指導力の向上	○	○	○		
3	生徒の自己肯定感の向上と生徒・保護者との信頼関係に基づいた生活指導	○	○	○		

5 令和5年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン									
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)				コメント・課題		達成度 ◎○△●	
基礎学力の定着と向上		区学力テスト 目標通過率 65%			国語	数学	英語	数学は少人数指導を実施しており、目標の通過率を達成できたが、国語・英語はあと一歩届かなかった。 1年生は、小学校で不登校傾向であった生徒が多く、基礎的な学力が不十分な生徒が多い。そのため、学習に対する意欲が伸び悩み、自己肯定感も低い傾向が強い。 能力に応じた課題に取り組ませ、少しずつ自信をつけさせていく必要がある。		△	
				1年	51.6	51.6	54.8				
				2年	86.5	89.2	86.5				
				3年	51.7	79.3	34.5				
				全校	64.9	74.2	60.8				
B 目標実現に向けた取組み											
新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果		コメント・課題	達成度 ◎○△●	
1 継 続	1年間の 総復習	1・2学年 3教科	3月初旬 までに実施	<ul style="list-style-type: none"> 区調査問題を活用した、到達確認テストの実施 未到達生徒への補習実施 正答率30%未満の問題を再度指導 	到達確認テストの採点結果	・正答率60%	平均正答率	1年	2年	<ul style="list-style-type: none"> 目標には1.6ポイント足りなかった。 数学の重点的な支援が必要である。 	△
							国語	61.0	83.9		
							数学	35.0	51.0		
							英語	51.3	68.2		
							学年平均	49.1	67.7		

2 継続	ICTの活用	全教員	通年	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書の活用 単元内でタブレットを複数回活用 	<ul style="list-style-type: none"> 学校評価アンケート 活用確認調査 	<ul style="list-style-type: none"> 肯定的回答 80%以上 80%以上実施 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒による授業評価では約65%の肯定的評価を得た。しかし、2割の生徒がタブレットを使用していないと評価している。 講師以外の授業ではほぼ毎時間モニターを活用している。生徒の学習用タブレットの使用頻度は教科ごとの差が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの教員が授業にはタブレットを持参し、資料の提示等でICTの活用は行っているが、アプリやクラウドを活用して意見交換や授業の振り返りを蓄積させるなど、更なる活用の工夫、開発が必要である。 	○
3 継続	家庭学習とリンクした補充教室	全生徒 国数英の3教科	毎日 放課後 20分	前の週の家庭学習の確認テストを週初めに行い、不合格者を補充する	確認テスト	80%以上	<ul style="list-style-type: none"> 4月～10月のQubenaの平均利用状況は学習時間=494分、解答数=526.5問であった。 補充教室後の確認テスト合格率は各学年とも9割を超えている。(学年への聞き取り) 	<ul style="list-style-type: none"> 補充教室を経ての確認テストでは各学年9割の合格を維持しているが、Qubena事態の活用状況は昨年度を下回っており、生徒のAIドリルに対する意欲が減退傾向にある。新たな活用法や課題の工夫が必要である。 	△
4 継続	朝読書	全生徒	毎日 登校後 朝10分	毎朝教室で各自持参した本を静かに集中して読ませ語彙力・読解力を養う	学校評価 生徒アンケート	肯定的回答 80%以上	<ul style="list-style-type: none"> 各クラス着実に実施(校長による観察) 81.5%の生徒が「朝読書により自分の読書量が増えた」と回答。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝読書の取組が生徒にも十分浸透している。今後はクラウドを活用した読書記録や一言感想など、生徒によるアウトプットについても取り組んでいきたい。学校図書館との連携も強化する。 	◎
5 継続	青井 タイム	希望生徒	各定期 考査前 5日間 程度	学習支援ボランティア等を活用した定期考査前の自主学習教室を実施	参加生徒数	定期考査ごとの参加生徒の延べ人数 20名	<ul style="list-style-type: none"> 11月までに3回(15日)実施。参加人数は延べ165名。1回平均は11名であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の参加率は徐々に上がりつつある。放課後の図書館利用も含め、生徒が自主的に学習に取り組むことのできる環境整備を推進する。 	○
6 継続	サマー スクール	希望生徒	夏休み 7日	前半5日間を数学特訓教室の他、講座形式の補習教室とし、後半2日間は宿題質問教室とする	参加生徒数	各学年在籍数の5割以上	<ul style="list-style-type: none"> 7/24(月)～28(金)(5日)と8/24(木)・25(金)の計7日実施 1年生は数学勉強合宿のみ実施(7/21～31(土)を除く7日間) 参加人数は 1年=9名(29%) 2年=14名(35%) 3年=22名(61%) 	<ul style="list-style-type: none"> 中1勉強合宿平均正答数 事前=31.6 事後=47.6 3か月後=34.4 	○

重点的な取組事項－２		教師の学習指導力の向上			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
小中連携・校内研究を通じた学習指導力の育成	以下の研究授業等の実施	・年間に実施計画に沿って、全7回を実施。	・昨年度までの教科別の授業研究から、「言語活動」「ICT利活用」「課題解決型学習」の3つの課題に取り組む分科会で研究を進めた。教科横断的な発想も芽生えつつある。今後は、9年間を通して身に付けさせたい力の共通認識に基づいた指導方法の探求を推進していきたい。	○	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
小中連携研修	小中合同研修会において、授業公開・指導案検討・研究授業・協議会を実施する。年間6回の研究授業・5回の協議会を開催する。	「児童生徒が主体的に学習する授業展開の工夫」を青井中・青井小・加平小3校共通の研究課題とし、指導案検討を行い、年間6回の研究授業を行う。	・年間に実施計画に沿って、全7回を実施。	・昨年度までの教科別の授業研究から、「言語活動」「ICT利活用」「課題解決型学習」の3つの課題に取り組む分科会で研究を進めた。教科横断的な発想も芽生えつつある。今後は、9年間を通して身に付けさせたい力の共通認識に基づいた指導方法の探求を推進していきたい。	○
授業研究の実施	・成果発表授業、研究授業を5回以上実施する。 ・授業見学週間を教科・道徳各2回実施する。	・教科指導専門員を活用し、授業改善に日常的に取り組む。公開授業・研究授業を行い、指導力の向上を図る。 ・道徳授業地区公開授業とリンクさせ、道徳研究授業に取り組み、指導力の向上を図る。	・成果発表授業、年次研修、区中研等を活用し、年間6回の研究授業を行った。 ・道徳授業地区公開講座の他、校内での授業見学週間、道徳見学週間を2回ずつ実施	・区中研、小中連携研修、あだちからの日など区全体の日程が多く、純粋に校内研修としてまとまった時間をとることが困難な中、様々な工夫を重ねて授業力向上を目指した取組を実践することができた。	○

重点的な取組事項－3		生徒の自己肯定感の向上と生徒・保護者との信頼関係に基づいた生活指導			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自己肯定感向上研修と生活指導		生徒・保護者・地域からの学校評価で肯定的な回答80%	・生徒評価 「学校生活は楽しい」91.3% 「自分の良さや努力を先生や周りの人から認められている」75%	・概ね生徒は学校生活に満足しているが、自己肯定感を高める評価や働きかけを更に工夫していかなければならない。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
自尊感情・自己有用感等の育成研修、特別支援教育研修の実施	校内研修・授業研究・公開授業を6回実施する。	・自尊感情や自己有用感等を育成するため、特別支援教育や人権教育・キャリア教育の研修も取り入れ、授業者のスキル向上に努める。 ・研修は職員会議後に設定するなど計画的に実施する。	・職員会議等を利用して特別支援教育、キャリア教育、人権教育に関する研修をそれぞれの担当教員からの資料提供や還元研修という形で実施した。	・小規模校という特性を生かし、日常的に情報交換や研修報告等を行い、まとまった時間が取りづらい中でも、効果的な研修の機会を工夫できた。	○
自他を尊重する規範意識の育成	・生活指導部会を定期的に実施する。 ・生徒アンケートで、「きまりを守っている」という回答が、80%以上	・生活指導方針に基づき、凡事徹底を図る。生活指導部会で認識を共有し、生徒指導に当たる。主体的に委員会・行事を運営させることで、規範意識の向上に努める。	・生徒評価 「学校の決まりを守っている」93.5% 「校内の公共物を大切にしている」98.9% 「学校行事は充実している」93.4% 「生徒会(委員会)は活発に活動している」92.4%	・教員と生徒の信頼関係に基づく指導により校内での生活は安定している。	◎
家庭と連携した生徒指導	・教育相談等を年に2回行う。 ・修学支援委員会の定期的に実施する。 ・必要な生徒・家庭への特別な支援を実施する。 ・いじめの早期発見と解消を図る。	・教育相談2回、1年は家庭訪問も行う。 ・修学支援委員会(特別支援兼不登校対策)を毎週開催し、情報交換を行う。SC・SSWと連携して対策を検討する。 ・担任は、支援が必要な生徒・家庭と随時連絡・相談を行い、青井ルームの活用、外部機関との連携等を図り、不登校の発生・解消に努める。 ・日常の観察と家庭との情報交換、定期的ないじめに関するアンケートを実施し、早期発見と早期解決を図る。	・教育相談、家庭訪問は計画どおり実施 ・修学支援委員会も毎週定期的に開催し、登校状況や支援の方向性について情報共有できた。 ・投稿支援サポーターを配置して「青井ルーム」(不登校生徒自習室)を開設。 ・夏休み明けに「教育相談ウィーク」実施。	・様々な要因により生徒の心の安定が十分に図られず、不登校生徒の大幅な減少には至っていない。しかし、SCやSSWも活用し、保護者との連携を強化し、連絡の取りづらい生徒は皆無である。一時的に登校できなかった生徒のほとんどは教室復帰を果たしている。	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

① 基礎学力の定着と向上

4月に行われた区学力調査の3教科平均通過率は66.6%となり、目標としていた65%は何とかクリアできたが、学年別・教科別で比較するとばらつきが大きく、生徒の実態に応じた対策が必要な状況であった。ICTを有効に活用した授業改善を推進し、学習意欲の向上と基礎・基本の学力の定着を目指す取組を強化する。それにより主体的に学習に取り組む態度を育成し、自分の言葉で考え、説明できる力を伸ばしてゆく。また、各種検定（漢検・数検・英検）を各2回以上企画し、資格取得を奨励する。AIドリルを活用し、毎日の授業・家庭学習とリンクした放課後補充教室を実施する。朝読書・サマースクール・長期休業中の自習教室などを計画的に実施し、自主的に学習に取り組む意欲と態度を育成する。

② 学習指導力の向上

青井中・青井小・加平小の3校による小中連携研究会では、「言語能力・情報活用能力、問題発見・解決能力を育成する授業展開の工夫」というテーマで研究授業ならびに研究協議を行ってきた。年間6本の研究授業、年5回の合同研究協議会と2回の全体研修を実施した。

校内研修として、指導力向上を目標に成果発表授業・研究授業を6回、相互授業見学週間を年2回、道徳授業見学週間を年2回実施した。足立スタンダードに基づく学習プロセスの中で、課題解決型授業展開を取り入れている。小中連携と教科指導専門員の活用、「道徳」を中心に来年度も教員の指導技術の向上に取り組む。

③ 生徒・保護者との信頼関係に基づいた生活指導

「凡事徹底」をキーワードに、学年の枠を取り払い、授業および生活規律の確保に「チーム青井中」として全教職員で取り組んだ。生徒は落ち着いており、委員会・行事等を通じて自分たちでより良い学校を創ろうと活動している。教育相談、家庭訪問等は計画どおり実施し、保護者との共通理解を図りながら生徒指導を実践できた。

部活動については、複数顧問制を取りながら、活動機会を確保したが、運動部に関しては部員数の減少から単独での大会参加が不可能となり、合同チームによる大会参加を行った。日常の活動の成果を実感する場を確保できたことで、部活動に対する生徒満足度は高い状態を維持できた。

生徒用玄関前にベンチを新たに設置し、昼休みや登下校時に教員や異学年の生徒が気軽にコミュニケーションを図れる場として活用している。道徳、キャリア教育、特別支援教育等、心に響く指導に努め、落ち着いた中にもリズムのある学校生活を過ごすことができるように、継続して指導を進める。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

今年度も、朝礼や全校集会だけでなく、「特別の教科道徳」の授業を要に総合的な学習の時間、特別活動等も使って、全校体制で命の大切さや人権について考えることができました。また、足立区の姉妹都市であるオーストラリアのベルモント市から来日した学生使節団との交流や駐日EU代表部からゲストティーチャーを招いて行った国際理解教室など国際感覚を磨く体験も実施することができました。

本校は、生徒が明るく仲良く元気な学校生活が過ごせるよう、職員が一丸となって一人一人の生徒を大切にしたい指導を行っています。数学の習熟度別少人数授業をはじめ各教科で個に応じた指導を重視し、基礎学力が身に付くよう学習指導しています。放課後は基礎学力定着をめざし、AIドリルを活用した補充教室を実施しています。また、青井小学校、加平小学校と連携し9年間の連続した指導計画を意識した学習指導するための研修を行うとともに、教員の指導力向上にも努めています。

生活指導では、規律と愛情を重んじ、家庭と連携した信頼関係に基づく指導を丁寧に進めています。生徒が主体的に取り組む委員会活動・行事を通して、自尊感情や自己有用感を育成しています。部活動は可能な限り複数顧問制を取り、活動機会を確保しています。

今年度は新型コロナウイルス感染症の五類移行を受け、規模や内容の見直しを行いつつもほぼすべての学校行事等の教育活動を実施・公開することができました。今後も積極的に学校での生徒の様子を公開していきます。ご家庭での指導の参考にしていただきたく、多くの方のご来校をお待ちしています。

(3) その他（学校教育活動全般について）

学校行事ではほぼ全員の生徒が何らかの役割を担い、まさに全員参加の取組となります。また、委員会活動や学級活動、ボランティア活動などに力を発揮する生徒も多い。特に今年度は規模や内容の見直しはあったものの、ほぼすべての学校行事等の教育活動を実施することができたため、行事や学校生活に関する生徒の満足度は昨年度より高いものとなっています。しかし、一部に自分に自信がもてず、居場所がなかなか見つけられない生徒もいます。学校行事だけでなく日頃の委員会活動や部活動、係活動などを通して、より多くの成功体験を積み、生徒の自己肯定感や有用感をもてるような指導を強化していきます。一人一人を大切にしたい、習熟度別少人数授業・放課後補充教室を実施して基礎学力の定着を図るとともに、生徒が意欲的に授業に参加し、主体的・対話的で深い学びを実現させるために、ICTの活用積極的に行い授業の活性化を図り、基礎学力向上と教師の指導力向上に引き続き努力します。

就学支援委員会（特別支援教育兼不登校対策委員会）を定期的に行い、SC・SSW・関係諸機関との連携を強化し、個に応じた丁寧な指導を行いました。人権教育、心の教育、平和教育、道徳、キャリア教育にも力を注ぎ、家庭と連携した生徒指導に取り組んでいきます。